ランチタイムミーティング参加記

登壇者：　家永香織先生

2025 年 12 月 17 日、文学部人文研究センターで開催されたランチタイムミーティングに参加させていただいた。今回のご担当は、文学部文学科の特任教授でいらっしゃる家永香織先生。家永先生は、主に平安時代後期から鎌倉時代前期の和歌についてご研究をされている。今回のお話は、そのご関心のなかから、「西行の和歌を読む」と題して、平安時代末期～鎌倉時代初期にかけて活躍した西行の和歌を取り上げたものであった。

西行といえば、筆者は高校時代に授業で習った記憶がある。最近では、大河ドラマ『べらぼう』で、「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」が紹介されるなど、現在でも有名な歌人のひとりであることは間違いない。特に、この和歌も収録されている『山家集』は、西行の代表的な歌集として高い評価を得てきた。しかし、今回のお話でスポットが当てられたのは、西行の数ある著名な歌ではなく、王道から逸脱した和歌である。

紙幅の都合もあるので、ここでは一つだけ書き留めたい。西国を旅した西行が、現在の岡山県玉野市・浦田の浜で詠んだ和歌である。

おりたちて浦田に拾う海女の子は　つみより罪を習うなりけり

これは、西行が、浜にいる子どもたちに何を拾っているのか尋ねたところ、子どもたちが、つみ貝を拾っていると答えたというエピソードにもとづいてつくられた歌だ。家永先生が注目するのは、西行が地元の子どもたちへ話しかけ、そこから得た情報を歌に詠みこんでいる点、そして、「海女」や「つみ（貝）」といった、伝統的に和歌に詠まれてこなかった言葉を使用している点である。

この二つの特徴について、家永先生は、これらが平安時代後期の歌人・源俊頼の影響によるものであることを指摘する。旅先で地元の人間と話したことを素材に歌を詠む方法は、俊頼も用いたものなのだそうだ。さらに、歌語ではない言葉の使用も、新しい和歌の表現を追い求めた俊頼が、積極的に行ったことであるという。歌集を介して、その創作手法までが継承されていくことが面白い。西行が示す俊頼への傾倒には、ちょっとアウトサイダーなものへ憧れてしまう気持ちもあったのだろうか、と憶測してしまう。

一方、西行だけのもつ特殊性もある。それは、海女や商人など、さまざまな職業の人びとを和歌の題材としたことだ。西行は、それぞれの職業を営む人びとが、日常生活のなかで使う言葉をそのまま和歌のなかに詠みこむことで、彼らの生活を和歌にした。先ほど挙げた「おりたちて」の和歌でも、「海女の子」の何気ない営みを、みたままに切り取っている。このような表現は、定型どおりに和歌を詠むことが一般的だった当時、

さぞ斬新なものであっただろう。そのまなざしは、旅先の土地で生きる人びとへの強い関心に支えられている。西行が、こんなにも社会派の歌人、いわばフィールドワーカー歌人だったとは。そう思うと、はるか昔の未知の歌人だった西行の姿が、どこか身近なもののように感じる。

筆者ははじめて知ったことだが、実は、『山家集』は絶対的な原本をもたないそうだ。このような歌集自体の不確定さと、西行の、さまざまな職業で使われた用語を詠みこむ手法が相まって、その和歌には意味のわからない言葉が頻出するらしい。そこで、今回のお話の最後に、家永先生より西行のふたつの和歌について、その解釈がフロアへの問題として出題された。

a. もの↘ふのならすすさびはおもた↘し　あちそのしさびかものいれくび

b. ものご𛀁にもりかきみかぞきこゆなる　いひあはせてやつまをこふらん

当日の質疑応答でも、フロアからさまざまな解釈、質問が寄せられた。かく言う筆者もあれこれと考えてみたが、正直、全くわからない。しかし、あれこれ考えをめぐらせることで改めて気がついたのは、正解がわからないからこそ、自由に和歌をあじわうことができるということだ。家永先生のお話をうかがうことは、西行のイメージが覆される、非常によい経験であった。これをお読みになった方も、ぜひ身近な誰かと、このふたつの和歌の解釈について話し合ってみてほしい。

濱下　知里（文学研究科博士課程後期課程）